

通し番号	3723
------	------

分類番号	12-35-15-02
------	-------------

イセリヤカイガラムシの捕食性天敵ベダリアテントウムシの各種薬剤に対する感受性	
[要約] イセリヤカイガラムシの捕食性天敵ベダリアテントウムシの各種薬剤に対する感受性は、薬剤やステージにより異なっていた。フェネピロキサメの防除薬剤のうち、本成虫に対して比較的影響の少ない剤は、マブリックEWとネオツブコブアルであり、幼虫に対して影響の少ない剤はカバ水和剤であった。その他、ダイジノ水和剤、カスケード乳剤、バニ防除薬剤各種、ジマンダイセン水和剤の影響も少ないと考えられた。	
農業総合研究所 根府川試験場	連絡先 0465-29-0506

[背景・ねらい]

近年、神奈川県で問題となっているイセリヤカイガラムシの局地的多発は、フェネピロキサメ等の防除のために合成ピレスロイド剤が複数回散布されたことによるリザーゼンズが原因と考えられている。そこで、イセリヤカイガラムシの捕食性天敵であるベダリアテントウムシの各種薬剤に対する感受性を調査し、本虫に影響の少ない薬剤を探索する。

[成果の内容・特徴]

- (1)ピレスロイド系薬剤では、成虫、幼虫とも感受性の高い薬剤が多かったが、マブリックでは成虫に対する感受性が比較的低かった。
- (2)有機リン系薬剤では、ジメトエトは幼虫に対して感受性が高かったが、成虫では2週間以上生存する個体もあった。スプラサイド、オルトラン、ダイジノは、2週間以上生存する個体も見られたが、蛹化後の羽化が正常にできない剤も存在し、この中ではダイジノの影響が比較的低かった。
- (3)ピロロール系のネツに対しては成虫・幼虫とも感受性は低かった。しかし処理した幼虫の60% (6頭)が蛹化・羽化したが、このうち4頭は正常に羽化できなかった。
- (4)カーバメート系の2剤に対しては、成虫・幼虫とも感受性がかなり高かった。
- (5)クロロコル系2剤も幼虫・成虫に対する感受性は高かった。
- (6)IGR系のカスケードは直接の影響は少ないものと考えられたが、羽化率が低い傾向にあった。
- (7)チオリア系のガンバは、成虫処理では1週間後の生存率が20%であるのに対し、幼虫処理では80%であり、処理するステージにより感受性の違いが認められた。
- (8)バニ防除剤各種の影響は少なかったが、幼虫に比べると成虫に対する感受性が高いことが示唆された。
- (9)ジマンダイセンは、ベダリアテントウムシに対しては影響が低かった

[成果の活用面・留意点]

1. 環境保全型農業を推進する場合は、ベダリアテントウムシに対して影響の少ない薬剤を選択する。
2. 次世代への影響については未調査である。

〔 具体的データ 〕

表1 供試薬剤と希釈倍率

供試薬剤名	一般名	倍率	供試薬剤名	一般名	倍率
アグロスリン乳剤	ジハルメトリン	2000	マイクロナホソ水和剤85	NAC	1500
テルスター水和剤	ピフェントリン	2000	オリオン水和剤40	アラニカルブ	1000
ロティー乳剤	フェンプロパトリン	2000	モスピラン水溶剤	アセタミプリド	4000
マブリックEW	フルハリネート	2000	アドマイアフロアブル	イミダクロプリド	4000
DDVP乳剤75	DDVP	1000	カスケード乳剤	フルフェノクトロン	2000
スプラサイド乳剤40	DMTP	2000	ガンバ水和剤	ジアフエンチウロン	1000
エルサン乳剤	PAP	1000	オマイト水和剤	BPPS	750
オルトラン水和剤	アセフェート	1500	カネマイトフロアブル	アセキノシル	1500
カルホス乳剤	イソキサチオン	1000	ハロックフロアブル	エトキサゾール	3000
ジメエト乳剤	ジメエト	1000	サンマイト水和剤	ピリダベン	3000
ダイジノン水和剤34	ダイジノン	1000	コロマイト水和剤	ミルベメクチン	2000
ゴテツフロアブル	ケルフェナピル	4000	ジマンガイセン水和剤	マンゼブ	500

表2 ヘタリアントウムシに対する各種薬剤の影響

	成虫処理生存率 (%)					幼虫処理生存率 (%)						蛹化率 (%)	羽化率 (%)
	1日	2日	5日	7日	14日	1日	2日	5日	7日	14日	(%)		
アグロスリン乳剤	40	-	30	20	0	0							
テルスター乳剤	60	10	0			50	0						
ロティー乳剤	80	0				30	10	0					
マブリックEW	50	50	40	40	0	0							
DDVP乳剤75	0					100	90	0					
スプラサイド乳剤40	20	10	10	10	10	70	70	20	20	10	20	10	
エルサン乳剤	70	50	10	0		70	50	10	0				
オルトラン水和剤	80	40	40	30	30	90	40	20	20	10	20	10	
カルホス乳剤	0					20	0						
ジメエト乳剤	50	40	40	40	10	30	0						
ダイジノン水和剤34	100	-	80	40	20	100	-	60	60	40	50	40	
ゴテツフロアブル	100	100	80	80	50	90	90	90	90	60	60	60	
マイクロナホソ水和剤85	0					50	10	0					
オリオン水和剤40	0					30	-	10					
モスピラン水溶剤	30	10	0			50	10	0					
アドマイアフロアブル	90	20	0			0							
カスケード乳剤	80	-	80	20	10	100	-	70	70	20	70	20	
ガンバ水和剤	90	-	20	10	0	90	-	80	80	40	50	40	
オマイト水和剤	100	100	100	80	0	100	100	100	70	60	70	60	
カネマイトフロアブル	80	80	80	50	20	100	100	60	50	50	60	50	
ハロックフロアブル	90	90	90	40	0	100	100	100	100	80	100	80	
サンマイト水和剤	100	100	100	80	10	100	100	80	80	70	80	70	
コロマイト水和剤	50	50	50	40	0	50	50	40	30	10	20	10	
ジマンガイセン水和剤	90	80	70	60	10	90	90	90	90	80	80	80	
蒸留水	100	100	70	70	40	100	90	90	90	90	90	90	

〔 資料名 〕 平成12年度試験研究成績書 (カンキツ・キウイフルーツ)

〔 研究課題名 〕 環境保全型病害虫管理技術の確立

〔 研究期間 〕 平成12年度

〔 研究担当者名 〕 鈴木 誠・浅田真一